

編集後記

○昨夏の旧ソ連の保守派八人組によるクーデター騒動、明智光秀式に三日天下で終ってしまいました。それから加速されたソビエト連邦という人工国家の崩壊に至るドラマは、TV画面に人々を引きつけてしまいました。

二十世紀最大のドラマとして、夜明けまでTV画面に見入る夜が幾度くり返されたことでしょうか。私にとっては読本を読むより興がありました。TV深夜放送中毒症状でありまし

た。七十年間という永い歳月を費した社会主義の実験的政治体制が、反体制という名のもとに幾千万とも称せられる想像を絶した犠牲者を出し続けたゲーペーウー政治体制が、三日天下のクーデターのショックで、もろくも崩壊するのですから、世界の人が予想もしなかった事態といえるでしょう。結果的には二大超大国の対立による東西冷戦という、地球の破局を予想させる米ソの対立状況は解消しましたが、第二次世界大戦後の東西対立という名の安定状況が崩壊してしまっただけからか、全世界的規模で地域紛争が惹起してききました。民族・宗教という名の対立です。今は日夜世界の各国で殺し合いが続いているので

す。カンボジャ紛争の平和的解決維持のためのPKO派遣とやらの国会承認というの、平和憲法逸脱の疑いも云々されながら、牛歩戦術だの議員総辞職だのという猿芝居で、結果的には革新政党という名の旧態依然政党的醜態をさらしてしまいました。かつて石川啄木が時代閉塞と嘆いたことではありますが、今の日本も時代閉塞的政治状況と言えましょうか。

○それにしても旧ソ連のノーマンクラトゥラとか称する共産党の特権階級の人たちは、ソ連崩壊後はどのように生きているのでしょうか。敗戦後の日本の一部のインテリのごとくに一夜にして変身を遂げて新しいエリツイン体制に順応していくのでしょうか。保守派の反撃とか策謀とかが報道されていますが、果してどうなるのでしょうか。時代の変革期には何かと反動のあるものです。関が原の戦の後で徳川幕藩体制が確立されていく過程での大阪冬の陣、夏の陣の戦も反動の一つと言えるでしょうし、三十数年後に島原の乱があり、五十年後に由井正雪の謀叛がありました。これらは浪人たちの反動という性質が強いようです。新しい体制を模索しての展望を有する争いではなかったようであります。明治維

新の時も同じような反動が各地で見られました。今のロシアにそれがないとは言いい切れなんでしょう。旧体制内のエリート集団たるノーマンクラトゥラが、黙して特権を手放すとも思えないからです。そして今の現在、廃棄の方向で動いてはいますが、ロシアには東西冷戦体制の遺物たる大量の核兵器が存在するのですから、ノーマンクラトゥラの反動次第では地球的規模の恐怖が発生する可能性さえあります。由井正雪の騒動ぐらいで収束されればいいのですが、核兵器を利用しての反動となると前代未聞の騒動となるでしょう。人間の叡智を信じたいところですが、人間は何とも愚かしい一面も有する動物ですから、果してどうなることかと不安になることもあるのです。CSCC首脳会議とやらがヘルシンキで開催されて、日本も特別ゲストとやらで出席を許されたというので喜んでいますが、北側の先進富裕国の勝手な安全保障とやらは、貧しい南側の発展途上国にどのよう映ずるのでしょうか。経済大国にはなつたようですけれども、それだから一層のこと極東の小さな島国である日本の目は、北よりも南へ、西洋よりも東洋に向けられなくてはならないのではないのでしょうか。ともあれ

クーデターからソ連崩壊に至る間の週刊誌・雑誌・単行本を手当り次第買い集めたのですが、積み重ねると等身大で、お倉のクズがまたまた増大したことです。

○国文学科の教室でも、時の流れでありました。昨年から少し変調があります。書道専修の塚田康信先生が昨年の十九号台風の時に少し御無理な旅行がたたって（台風によるJRの混乱が主因ですが）脳血栓で倒れられ、あのお元氣な先生がと皆驚いたことでした。

当面御静養願わなくてはならないということで、御講義の代役として、香川大学の小林久麿教授、鳥取大学の登川英明助教授、福岡教育大学の小原俊樹助教授、筑波大学の中村信夫助教授の各先生方に御出講をお願いして急場をしのいだのでした。急なお願いをしたのですが、日比野先生の熱心な懇請に氣持よく応じて下さって、本学書道専修の講義体制には微動もありませんでした。集中講義の集中に学生諸君は少し疲労感をおぼえたかも知れませんが、見たところ多くの先生方の多面的研究を小氣味よく吸収しているようでした。塚田先生にはその後、先生の現場復帰への強い意志と相まちまして奇跡的回復が見られ、平成四年の四月の新学期からは通常の勤

務になられました。いづらか御講義などはセーブしていただいているのですが、ともあれ一日も早い昔日の塚田先生復活を願うことであります。

○私がC型肝炎、湯之上先生がインターフェロン不適応C型肝炎、友久先生が主因不明の顎下の腫れの手術などなど不協和音はありますが、これは老化現象に伴う一病息災のあかし也と自慰しながら、皆さんと共に一致して教室の活性化に努めることであります。その活性化に資する強力なメンバーが一人、平成四年の四月から加わっていただきました。小川輝夫教授の後任である国語学の古田雅憲講師です。古田先生は福岡の名門校修猶館高校から九州大学文学部文学科に進学、更に九州大学大学院文学研究科において国語学の研究を志されたのですが、昭和六十年修士号取得後、発心して現場に出られ（学より愛を選んだとか、学問の在り方に疑問を抱いたからとか、大変優れた研究者の卵であっただけに、九州大学ではさまざまな伝承が生じているようであります）、久留米大学付設中高等学校という当地でのエリート校での教育に専念されておりました。数年このエリートたちと教育的格闘を続けておられた時、再び国語学研

究の興が胸内に生じてきて、それを小さな論文にまとめて発表されました。これが九州大学の恩師である中野三敏教授のお目にとまり、たまたま本学から国語学の先生を求めているという話と幸福な結合となり、このたびの御赴任となったのであります。古田先生は生粹の博多っ子です。九州男子は血の氣が多いというのが通説でありますから、微温的な安芸の国風に馴染んでいただけるかどうかと一抹の不安もありますが、本学には良俗淳風の九州女性が数多いことですので、まずは大丈夫と思っております。古田先生の御専門は抄物研究であります。これも今から研究されるべき未開拓の分野でありますので、期待益々大なるものがあります。少し買い集めていた近世の辞書を学生たちが調査し始めて、卒業の論文の対象にし始めました。これも古田効果であります。

○ところで今一人、紅一点が本教室に加わりました。国文学科、英文学科共通ということではあります。この春本学の大学院文学研究科国語学国文学専攻の修士課程を修了された橋口純子さんがその人です。教育機器室常駐であります。国文学科の教室運営に主体的かつ積極的に参加して下さっております。

文学部、短期大学の国文学関係の部門を大同団結して、この国文学会で運営していかうということでした。従来それは当然のこととして考えられていたのですが、会則には明記されていなかったのです。まあ手落ちであります。二つには、近時卒業生の数が多くなつてきて、当分この傾向は続くものと考えられますので、連絡その他の郵送料が激増して学会の運営資金を圧迫してきているという事態に対処するため、会費の値上げが必須となつてきているということです。今までは井勘定で何とかごまかしていたというところで、そこで会則の変更として、各部門を明記出してみました。欠席の返事が多かったことは当然ですが、一応なつかしい名前のも沢山ありましたので、本学の国文学会を認識はして下さつていようであります。今後の問題は、学会で発行する「文教国文学」を卒業生にどのように送っていくかということです。卒業時に三年間の会費を前払いしていただいていますので、三年間は当然「文教国文学」をお送りしているのですが、その後の処置の問題で悩むのです。三年後からの会費納入の件数が少なく（ということは、広島文教女子大学国文学会の魅力が少くないということ、私どもとして十二分に反省しなくてはな

して挿入すること、会費を二千円に増額することが論議されたのでした。ただし在學生は従来通り半額の千円とするのです。この会則の変更案が、今回の総会で出席者全員の賛成で、承認されたのでした。これからの学会運営が円滑になることを願うことであります。

○学会の中心的事業は、「文教国文学」の発行と研究発表会の開催です。学会は曲がりなりに順調に開催してきており、近時は卒業生の参加も大変多くなつて参りました。本年の学会開催に際しては、美樹会名簿の作成に便乗して、今までの全会員に往復葉書で案内を

りません）、会誌送付打ち切りにしなくてはならない件数が多いということなのです。これは本学に折角に縁あつた会員が縁切りになるということでは悲しいことなのですが、どこかで思い切らなくてはならないのは止むを得ないでしょう。ただ今回会則の改訂を機会に、今一度卒業生の皆さんに会費納入のお願いをしてみたらというようなことを話したことです。忙しさにかまけてついうっかり納入しそこねるということは、私どもの日常よくあることなので、ここで卒業生全員に回覧板を回してみようということです。皆さん、今一

度広島文教女子大学の国文学科（文学部・短期大学部を含む）における楽しい生活を思い出してみて下さればありがたいことです。以上PR用文言です。

○広島文教女子大学国文学会の運営について
若い方たちが話し合っておられた中で、「文教国文学」の発刊以外に、何か小さな通信用冊子を作って卒業生の皆さんとの交流を深めたいという議論が提案されていました。いろいろとむづかしい問題もありそうで、一挙に実現ということにならないかも知れませんが、ともあれ卒業生の皆さんとの連絡の在り様に工夫がなくてはならないと考えていることであります。卒業生の皆さんからも、何かいい知恵がありましたら御連絡下さい。連絡先は、当然のこと「文教国文学」の発行元であります。

○今年は空梅雨気味で渇水対策の心配もあるようですが、水に縁の深い夏の景物が、私の住む鈴張の川辺に沢山見られたことでした。鈴張川の小さな流れも我が茅屋の前では小さな淵を作るぐらいになっているのですが、戦前は拙宅前の橋の上に螢見物の人が集まることもあるぐらいのことでした。ところがこの二・三十年前からとんと螢の光を見る

ことが出来なくなっておりまして、DDTから始まる農薬による清流の汚染が、螢の幼虫の生息を困難にしていたのでしょう。お米の増産と螢の生息とは両立しがたいことであつたのですが、この二・三年前から再び何となく螢の光を見ることがあるようになったと思っております。そして今年にはつきり螢復活を意識したのでした。復活の理由は判りませんが、自然のサイクルが又還ってきてくれたのでしょうか。兩岸の田圃がこの数年休耕（私の家の数ヶ所の田圃もその一つですが）して、螢の幼虫の育成によい結果をもたらしているのかも知れません。川岸の雑草の間を縫って、螢の群の光がスーイ・スーイと带状に光弧を作って流れていく様は、夢幻的光景で心がほっといたします。ホーホー螢来い！あっちの水はにーがいよ！こっちの水はあーまいよ！ホーホー螢来い！

（贅注） この螢は、卒業生諸姉を指すとは「言わぬが花」ですが。

（横山邦治記）

文教国文学 第二十九号

平成四年七月三十日 印刷
平成四年七月三十一日 発行

（非売品）

編集者 広島文教女子大学国文学会

代表 友久 武文

発行所 広島市安佐北区可部東

一丁目二番一号

広島文教女子大学

国文学研究室内

広島文教女子大学国文学会

（振替）広島六一三四八九四

印刷所 溪水社